

Part 2

先行導入例レポート

コミュニケーション環境の改善に取り組む企業は、どのような狙いを持ってそれを始め、実際にどのような効果を上げているのだろうか。3つの先行事例からUC導入のポイントを探る。

業務効率改善の観点からUCを導入するのは容易ではない。コミュニケーション環境を改善したいと望みながらも、最初の一步が踏み出せない企業は多いことだろう。

現にコミュニケーションの効率化に取り組んでいる企業は、どのようにしてその壁を破り、実際にどのような効果を上げているのだろうか。UC先行事例の実情を追ってみた。

アンリツ 口コミで広がるUCの輪

OCS2007をリリース前の07年秋からテスト導入し、08年4月から本格運用を開始したアンリツ。経営情報システム部インフラソリューションチームの篠原雄二課長によれば、主目的はいわゆるUCの実現ではなく「Web会議の活用」だったという。

国内外に複数の拠点とグループ会社を持ち、拠点間のコミュニケーションが頻繁な同社では、かねてよりPC上で手軽にミーティングができるWeb会議へのニーズが高まっていた。いくつかの製品を比較検討した上でOCSを選んだ理由は「グローバルなサポート体制」。「正直に言えば、使い勝手やコストパフォーマンスに優れた国内の製品は他にあった」と篠原氏は当時を振り返る。

それとほぼ時を同じくして、アンリツでは老朽化した電話システムの更改も行っていた。従来は拠点ごとにPBXを配置していたが、08年8月に、本社拠点に導入したUNIVERGE SV7000を核としたIPセントレックスシステムを稼働。拠点間の通話をIP網によって内線化した。

同社の電話システムはこの更改以前から、固定電話をほとんど使わずPHSをメインにしている。部署ごとに代表電話を受けるPHSが置かれ、それが鳴るとメンバーがピックアップする。社員のモビリティを妨げず、またオフィス内の配線を無くするのがその目的だ。IPセントレックスでもこれを踏襲。さらに、OCS2007とSV7000を連携させ、PCクライアントであるOffice Communicator(OC)とPHS間の通話も可能にした。

「以前からPHSを使ってきたが、コミュニケーションのスタイルは人によってさまざま。ずっと机から移動せずには仕事をする人にはPHSは使いづらい。複数の手段を用意して相互にこなせることで、コミュニケーションを充実したものにしたかった」と篠原氏は語る。なお、一連の更改を前に電話システムの管掌も総務から情報システム部へと引き継がれていた。これも、OCSとSV7000の連携が可能



アンリツ
経営情報システム部
インフラソリューション
チーム
課長
篠原雄二氏

アンリツ
経営情報システム部
インフラ
ソリューションチーム
鈴木政志氏



になった要因と言えよう。

自然に増える“利用希望者”

アンリツのOCS2007運用のユニークな点は、ユーザーへのライセンス配布方法にある。通常は、全社一斉に利用を開始したり、あるいは特定の部署から利用をはじめ、その後部署単位でユーザーを拡大していくのが一般的だ。だが同社では、最初に数十人で小規模にスタートした後、その他の社員については、社員の自発的な利用希望申請に基づいてOCをインストールする形を取っている。

「自ら『Web会議で効率を上げたい』と望む人に使ってもらえるから導入効果が上がりやすい。効果を実感